

21世紀の日本のかたち（7）

--- ネットワーク社会 <その1> ---



戸沼幸市
(財団法人日本開発構想研究所理事長)

1. 短絡するネットワーク

路上でも、電車内でも、家の中でも、画像のついた携帯電話を手にした人々のいる風景が日常のものとなっています。友人との待合わせ場所と時間の精度も上がって、中間地点での待ちぼうけなど無くてすむし、今夜の予定変更も家人にすぐに知らせることもでき、ケータイやメールの普及は、子どもの行動や生活をスムーズに流させ、まことに便利な社会を創り出しつつあることを実感させます。ケータイやメール、パソコンは、今やこの情報ネットワーク社会につながっている人々の、生存と生活を支える生命維持装置のようです。

しかし、この情報ネットワーク社会の中に、様々な危険が潜んでいます。

21世紀、日本は、「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」必要な情報を手に入れることのできる高度情報社会、ユビキタスネットワーク社会に入っているようです。

自殺願望者のネットワーク、出会い系サイト、売買春のネットワーク、薬・麻薬販売のネットワーク、ケータイを持った小学生の連れ去られなど、見知らぬ人間がある時空の一点で結び合わされ、少なからずの人間破損、人間破壊が起きています。「オレオレ」詐欺も電話回線と銀行ネットワークをつなぐ顔の見えないネット社会の盲点をついた

巧妙な犯罪です。これが年商数十億とは。

情報ネットワーク社会の恐ろしいところは、多くの他人、あるいは、ある個人への中傷、集中攻撃です。小中学校の友達や会社の仲間に対するメールでの中傷は、時に攻撃される当人を死に追いやったりもしています。

ある犯罪者の、彼の両親への残酷なメディアの取材など、一度マスメディアの網に捉えられると、集中砲火を浴び、素裸で大衆の前に曝されてしまいます。それでいてネットの中の孤独もあります。

2. セーフティネット

21世紀の日本のかたちの大きな特徴は、人口減少、少子高齢化などです。情報、交通のネットワークに覆われた国土空間、社会の中で、在来のピラミッド型の社会構造、秩序が崩れつつあります。

安全の社会単位であるシェルター、家、家族が、三世代、四世代同居の大家族から親と子の核家族へ、そして老人の独居暮らし、未婚層の増大による、若年単身などの素粒子（単身）家族へと大きく変貌しています。一つの家族であっても、構成員の行動パターンは個人化しているように見えます。

つい二、三世代前までの伝統的な家族の持っていた親密な肉親の情愛に包まれた安全と安心のシ

シェルターが崩れ、また、顔見知りの支え合いが生きていた近所、近隣も、出入りの多い見知らぬ他人の集合となり、親和力を少なからず失っています。

この社会現象は、ネットワーク社会の進行が原因であり、結果でもあるようです。

個人単位でネットワークにつながる社会として、人々の安全と安心を支えるネットワークが、どのように機能するかの見極めが大切です。

最近、社会的弱者をサポートする様々なセーフティネットが急速に出現しています。

自殺を思いとどまらせる「命の110番」、心や身体の悩みを抱えた人を支援するボランティアネット、障害者同士のネットワーク、孤立した老人を支える地域ネット、子育て支援ネットグループ、国内外の災害時に瞬時に行動するネットワーク等です。まちづくり、地域づくりの支援活動もネットワーク型となっています。

これらネットワークの特徴は、肉声でつながり、人の顔の見える人間のネットワークです。人間の

情愛が流れています。

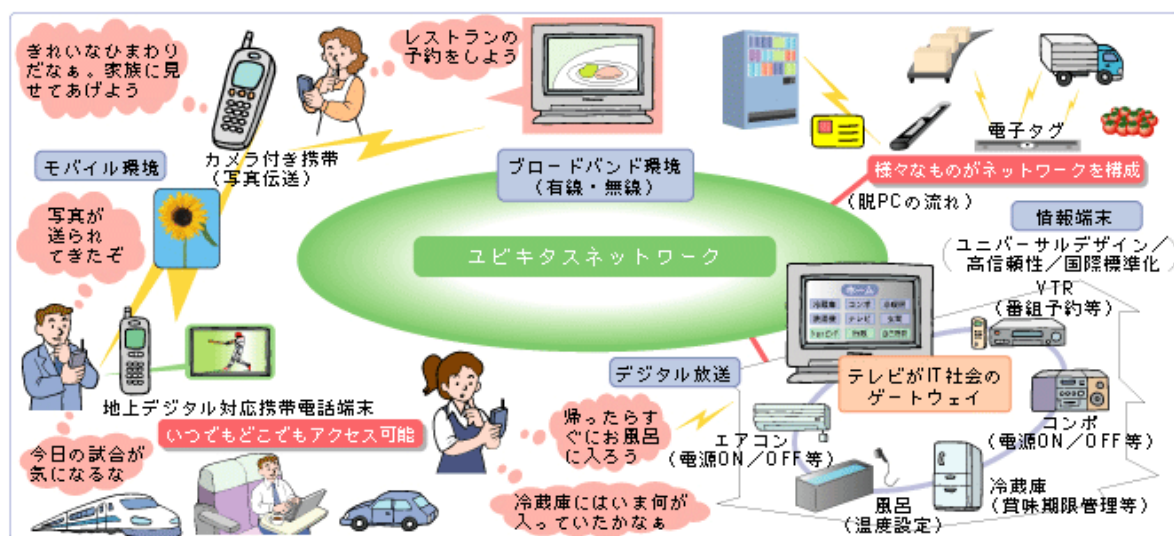
国や地方自治体の基本的な役割は、国民や市民の生存と生活を保障することであるはずですが、この公のセーフティネットには少なからずの穴ぼこがあります。この穴ぼこを埋めるかのように、NPO、NGOなどの住民、市民のボランティア活動が広がっています。

21世紀に立ち現れているネットワーク社会は、人間をどこに導こうとしているのでしょうか。本来、無機的人工装置である情報・交通のネットワークインフラは、国家や地域をどのようにしようとしているのでしょうか。国家というシェルターを越えて広がる巨大な人工装置としてのネットワークは、不気味にも経済や政治をも動かしています。これに対する見定めが「21世紀の日本の私たち」を考える基本命題のひとつと考えます。

以下、次号に続く

(2008年7月15日)

ユビキタスネットワークの実現イメージ



資料：「平成16年版 情報通信白書」